

【つながり & 共生】

ふれあい発見！みんななかま～グローバル編～ SDGs って何だろう？

【実践者】

氏 名	田中 利奈	学校名	伊勢崎市立赤堀南小学校
担当教科等	全教科	対象学年（人数）	4年3クラス（26,25,26名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2024年10月～12月（11時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

総合・道徳・社会

02 単元名と単元目標

単元名：ふれあい発見！みんななかま～グローバル編～ SDGs って何だろう？

単元目標：日本と他国の共通点や相違点を考えながら、他国の人々や文化に関心を持ち、多様性を尊重する態度を養うとともに、日本と他国の現状をジブンゴトとして寄り添い、「こうなったらいいな」を考えるを通して、共に生きることの大切さについて自覚するための素地を養う。

関連する学習指導要領上の目標：

- ・総合的な学習の時間：（1）探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようにする。
- ・特別の教科 道徳：18 国際理解、国際親善 他国の人々や文化に親しみ、関心をもつこと。
- ・社会科：（5）イ（ア）特色ある地域の位置や自然環境、人々の活動や産業の歴史的背景、人々の協力関係などに着目して、地域の様子を捉え、それらの特色を考え、表現すること。

03 単元の評価規準

① 知識・技能	絵や写真、グラフなどの具体的資料を通して、バングラデシュを例に、日本と世界の国々を比較して必要な情報を読み取り、特色や相互の関連、共通点、相違点について理解している。
② 思考・判断・表現	バングラデシュを例とした世界の国々と日本の特色や、相互の関連、共通点、相違点を考え、友達と話し合うことを通して、国際社会に見られる課題を把握し、ジブンゴトとして考えた「こうなったらいいな」をSDGsに掲げられた目標と結び付けて捉えている。
③ 主体的に学習に取り組む態度	国際社会について、他国の人々や文化に親しみ、関心を持ち、多様性を尊重するとともに、グローバルな視点でよりよい社会を考え、主体的・協働的に学習の問題を粘り強く解決しようとしている。

04 単元設定の理由・単元の意義

本単元設定の理由は、5年生の総合的な学習の時間に行っているテーマであるSDGsについて、その素地となる学びと、国際社会についての児童の思いの蓄積を図りたいと思ったからである。今、どんなことが世界で起こっているのか、また、他国と日本との関連、共通点や相違点は何かを学習することで、日本と他国は別のものであるという認識ではなく、「つながり」を感じ、グローバルな視点で物事を見る機会を与えることができると考える。本単元では、大きく「情勢」「国民性・食文化」「災害」「子どもたち」をテーマに、日本と他国を比較しながら共通点や相違点を考えていく。その中で、異文化を認め、多様性を尊重することの大切さや、ジブンゴトとして課題解決を進めることの大切さに気づき、「かわいそう」という同情から共感する態度への変容を図っていきたい。その中で見出した地球上の課題について、「こうなったらいいな」を考えることで、世界の人々に寄り添い、一地球市民として全体の幸せを願い、SDGsに掲げられた目標を意識して生活することに繋げていきたい。

〈児童/生徒観〉

七夕の願い事に、家族や周りの幸せを願った児童が多かった。自分だけでなく、周囲の幸せを考えることもできるようになってきているので、世界の人々にも関心を向け、思いやる気持ちや、仲間意識をもつことができるであろう。しかし、まだグローバルな視点で物事を考えている児童はいないに等しい。一人一人の行動が世界の問題に繋がっていることがあることも意識していない。おそらく、世界には飢餓に苦しみ亡くなる人がいることや、十分な教育が受けられない子がいることなど、なんとなく知っている児童もいるだろう。そのなんとなくの感覚を少しでも実感として受け止め、思いを寄せることができるようにしたい。

また、学習に対してあまり意欲をもつことができない児童が数名いる。自分が「できない」ことに悲観的になってしまっている。そういった児童を含め、一人では解決できない課題や、一人では考えを広げられない課題について、友達と対話することで新たな考えや納得できる考えにたどり着けることを楽しみ、解決していく力を身に付けてほしい。

〈指導観〉

世界の国々の一つの例として、バングラデシュを主に取り扱う。児童が「もっと違う国もあるかもしれない」「他の国ではどうだろう。」という視点をもつようにして授業を進めていきたい。以下に、本単元を3つの段階に分けて示す。

「つかむ」段階では、「せかいのひとびと」という絵本を元に、世界の異文化に触れ、日本との共通点や相違点を考えていき、本単元の概要を掴む。SDGsの目標を前提に地球の課題を見出すのではなく、解決しなければならない課題があるから立てられた目標であるSDGsにたどり着くことができるように、はじめからSDGsは取り扱わない。

「追究する」段階では、「情勢」「国民性・食文化」「災害」「子どもたち」をテーマに、フォトランゲージを主な手立てとして展開する。写真の風景や人々の様子から、世界の現状について協働的に想像を膨らませ、課題を掴んでいく。災害の課題について議論する場面では知識構成型ジグソー法も用いて、児童が資料の内容をジブンゴトとして捉え、解決方法を探ることができるようにする。この段階の展開を、情勢（政治）、食文化（宗教）、災害（自然）、子どもたち（人間）の順にすることで、段々と子どもたち自身の身近なものに近づけ、他国の人々に、ジブンゴトとして寄り添い、考えることができるようにしたい。「かわいそう」という同情の気持ちが生まれることも受け入れ、さらに、その先の共感へと授業を展開していきたい。

「まとめる」段階では、児童が世界について「こうなったらいいな」と考えた課題と、SDGsの17目標を結び付けて捉えていく。各課題については、これまで各時間の振り返りとして書き留めてきた「外国」と「日本」について気付いたことのカードを用いる。

05 単元計画（全11時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動
つかむ 1	世界と日本（自分）の共通点・相違点	世界の人々の様子、特徴などを知り関心を持ち、日本との共通点や相違点に気付くことができる。	・「せかいのひとびと」の読み聞かせを聞く。 ・人種、衣食住、性格、文化、言語などについて、挿絵を見たり文章を読み取ったりしたことから日本との共通点や相違点を話し合う。
	資料・教材など 絵本「せかいのひとびと」ピーター・スピアー		
追究する 2	多面的に捉えたいバングラデシュのデモ	バングラデシュで起きたデモについて、学生たちや犠牲になった人々など様々な立場から、一つのできごと「デモ」について考え、物事を多面的に捉えることの大切さに気付くことができる。	・学生たちがデモを起こした理由、バングラデシュの就職についての現状、デモがもたらした犠牲者と困難な状況を捉え、感じたことを共有する。 ・デモ後の学生たちの働きや、学生が新たな政権の一員となり貢献していこうとしている姿と、日本の若年層の投票率の低さを比較して感じたことを共有する。
	資料・教材など バングラデシュで起こったデモの情報		
3	バングラデシュと日本の関係、国民性、食文化	国によって食べ方が異なることを知り、違いを互いに認め合い、尊重して暮らしていくことの大切さに気付くことができる。	・バングラデシュと日本の関係を捉える。 ・日本で生活しているバングラデシュ人を知り、日本で暮らす外国人の人数を把握する。 ・バングラデシュ、ネパールを例にした手で食べる国と日本を比較し、互いに不快に感じるところを挙げてロールプレイをする。 ・異なる文化をもつ人同士が互いに気持ちよく生活するにはどうしたらよいか考える。
	資料・教材など ・日本で暮らすバングラデシュ人の方がお話ししてくださったときのスライド ・2018年度参加者 松本文美子先生の授業		
4	バングラデシュと日本の自然災害と気候変動 被害を少なくするため にどうするか	気候変動による被害を少なくするために必要な対策について考えるを通して、様々な支援・対策が必要であることに気付くことができる。	<フォトランゲージ> ・バングラデシュの洪水の様子の写真を見て、どんな様子なのか、人々の暮らしはどうなっているかなど想像する。 <ジグソー法> ・バングラデシュに必要と考えられる気候変動への4つの対策から、一番大切なものを選ぶ。 ・気候変動によるバングラデシュの被害状況を4観点に分け、それぞれについて、人々が被る困難さについて話し合う。（エキスパート活動）

			・4つの観点の被害状況から、再度一番大切な対策について考える。
	資料・教材など JICA バングラデシュ現地スタッフの話		
5	世界の子どもたちと自分	バングラデシュの子どもたちと自分の共通点や相違点を捉えたり、絵本を通して、世界の子どもたちの「今」を想像したりして、世界中に、今同じ時を生活している子どもたちがいることを意識することができる。	<フォトランゲージ> ・エクマットラの子どもたちの写真を見て、気付いたことを共有する。 ・エクマットラの子どもたちとオンラインで繋がった時の映像を見て、流行っているもの・楽しいこと・勉強の好き嫌いについて、自分と比較する。 ・「ぼくがラーメンたべてるとき」を読み、世界の子どもたちの現状を想像する。
	資料・教材など ・エクマットラとのオンライン映像 ・絵本「ぼくがラーメンたべてるとき」		
6 本時	児童労働を通して世界の子どもたちに寄り添う	フォトランゲージで想像を広げながら、世界には、児童労働に従事する子どもたちがいることを知り、彼らが仕事をしなくてもよかったら本当にしたいことは何か、自分の生活との相違点を考えながら話し合うことを通して、児童労働に従事する子どもたちの気持ちに寄り添うことができる。	<フォトランゲージ> ・ストリートチルドレン、児童労働、家事使用人を表す写真から気付いたことを共有する。 ・家事使用人ルビナさんの生活について、動画と生活時間のグラフを見て知る。 ・ルビナさんが、仕事をしなくてもよかったら一番したいことは何か考える。 ・前時で出会ったエクマットラの子たちが元ストリートチルドレンだったことを知り、次時では彼らの生活が変化した理由を探ることを意識する。
	資料・教材など ・シャプラニール 研修時スライド、ダウンロード教材、提供動画 ・エクマットラ 研修時オンライン風景		
7	エクマットラやシャプラニールの取り組み	世界の子どもたちを救うために力を尽くす人々がいることを知り、国際協力について考えることができる。	・「夢をもてない」と考えている家事使用人の子の記事を読んだ後、それでも今は夢をもっているシャプラニール支援センターの子たちや、夢を語るエクマットラの子たちの映像を見て、どうして夢をもてるようになったのか考える。 ・エクマットラとシャプラニールの取り組みを知る。 ・国際協力について考える。
	資料・教材など ・シャプラニール 研修時スライド、ダウンロード教材、提供動画 ・エクマットラ 研修時オンライン映像		
8	世界のプラス・マイナス	これまでの授業を振り返り、学んだことを、世	・これまでの授業で振り返りとして書いてきた外国と日本を比較して気付いたことをまとめ

		界のプラス・マイナスの面に仲間分けすることを通して、解決しなければならない課題があることに気付くことができる。	たカードを、プラスの面とマイナスの面に仲間分けする。
	資料・教材など		
9	世界が「こうなったらいいな」	世界が「こうなったらいいな」を考え、SDGsとの関連を意識することができる。	・前時でまとめたマイナスの面について、「こうなったらいいな」を考える。 ・その考えたことがSDGsの目標に繋がることを意識する。
	資料・教材など		
10	SDGs 17 目標	SDGs の 17 の目標が何を目標しているのか理解することができる。	・「ひろがれいろとりどり・SDGs 覚え歌」の曲の歌詞について、キーワードや想像したことを書き出す。
	資料・教材など ひろがれいろとりどり・SDGs 覚え歌		
11	世界の課題と SDGs の関連	それぞれの課題に関連する SDGs の目標を結び付けることを通して、世界で解決していることに気付くことができる。	・第8時でまとめたマイナス面と第9時で書いた「こうなったらいいな」に、SDGsの目標を結び付ける。 ・一つの課題に複数の目標が結び付くことを確認し、SDGsについて気付いたことを共有する。 ・この単元を勉強する前の自分と今の自分の違いを振り返り、自分にできることを考える。
	資料・教材など SDGs シール		

06 本時の展開（6 時間目）

本時のねらい：児童労働に従事する子どもたちが仕事をしなくてもよかったら、一番したいことは何か、自分の生活との相違点を考えながら話し合うことを通して、児童労働に従事する子どもたちの気持ちに寄り添うことができる。

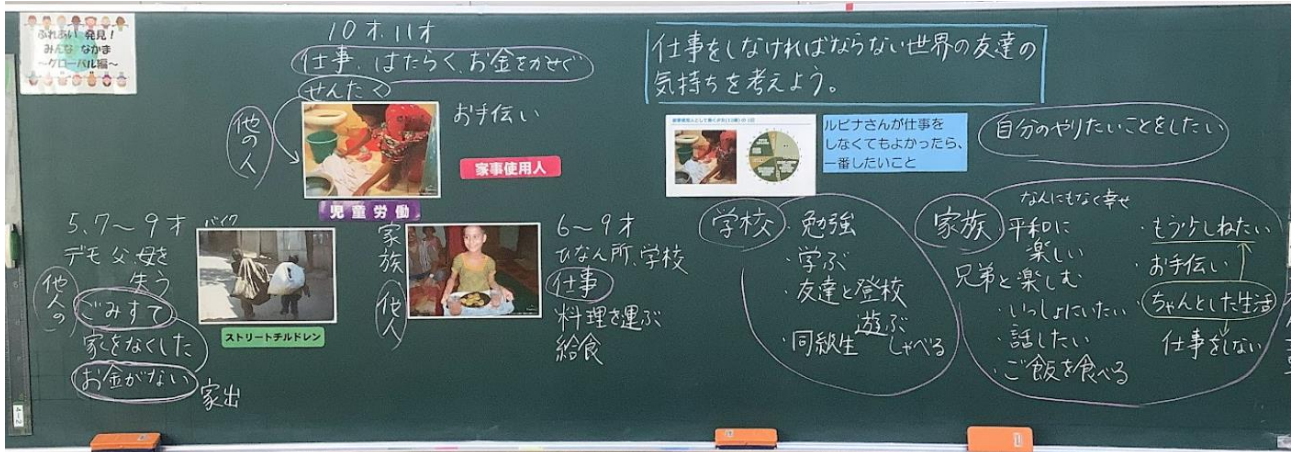
過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）
導入 (15分)	○児童労働の現状を知る。 【フォトランゲージ】 ・ストリートチルドレン、児童労働、家事使用人を表す写真から気付いたことや疑問を共有する。 T:何歳？何をしている？どこにいる？この子たちの生活の様子は？家族は？写真の人や物から想像してみよう。 写真A： ストリートチルドレン（児童労働） C: 何か運んでいる。ごみかな？ C: 子どもたちしかいないのかな？	・全体共有の際に、全児童が全ての写真を把握しておけるように、3種類の写真を2グループずつ分担して検討する時間と、気になる写真を見に行く時間を設ける。

	C: 貧しそう。 写真B: 家事使用人(ルビナ12才) C: 洗濯物をしている。 C: トイレ掃除をしている。 C: お手伝いかな? 写真C: 家事使用人(ショリファ9才) C: 食事を運んでいる。 C: 手伝いをしている。 T: この3枚の写真の子どもたちの共通点は何でしょう。 C: お手伝い?仕事? ○ストリートチルドレン, 児童労働, 家事使用人という言葉と, その人数を知る。	・より多くの考えを引き出したり, 想像を膨らませたりすることができるように, グループや全体で意見を出し合うときは, 問い返しをする。 ・人数の多さを実感するために, 漢数字を用いずに表示する。
展開 (5分)	めあて: 仕事をしなければならない世界の友達の気持ちを考えよう。 ○家事使用人ルビナさんについて知る。 ・ルビナさんの生活が分かる動画を視聴し, 思ったことを共有する。(ペア) ・ルビナさんの1日の過ごし方を知る。 C: 学校に行っていない。 C: こんなに長い時間働くの? T: みんなはこの生活をしたいと思う? C: したくない。大変そう。辛そう。	
10分	○ルビナさんのしたいことを考える。(個→ペア, グループ) T: ルビナさんが, 仕事をしなくてもよかったら, 一番したいことは何だと思いますか。 C: 学校に通う。勉強する。 C: 友達と遊ぶ。 C: もっと家族に会う。	・全児童が仕事の内容を把握できるように, ワークシート上で, 仕事の部分の表記を簡単な言葉にして示す。 ・ルビナさんに, より寄り添った考えをもつことができるように, 「一番」を考えて焦点化する。
まとめ (10分)	○振り返り(今日の授業で考えたこと) C: 仕事をしている子がいて大変だと思った。 C: 世界中の子どもたちが仕事をしなくて済むようになるとよい。 C: 学校に行って, 友達をたくさんつくってほしい。 ○前時で出会ったエクマットラの子たちの笑顔の写真を見る。 T: 実は, この子たちも元ストリートチルドレン。どうして笑顔でいられるのだろう。	・次時で, シャプラニール支援センターやエクマットラの取り組みを知ることにつなげることができるようにする。

使用する資料・教材:

- ・シャプラニール 研修スライド, ダウンロード教材, 提供動画
- ・エクマットラ 研修時オンライン風景
- ・児童労働ダウンロード写真

07 板書計画



08 評価規準に基づく本時の評価方法

家事使用人のルビナさんが仕事をしなくてもよかったら一番したいことは何かを考える場面において、ルビナさんの生活と自分の生活を比較し、相違点に着目しながら、ルビナさんの気持ちに寄り添い、一番したいと思うことについて考えている。

09 学校外との連携（※該当のある場合）

なし

10 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

★児童の振り返りより

文化について

- ・手で食べることなど、認め合うことがとてもとても大切だと思った。
- ・手で食べることを最初はきたないなと思ったけれど、私たちもパンやお菓子などを手で食べることを思いつき、バングラデシュの人も日本人も同じだと知ってびっくりした。
- ・手で食べるのがきたないと思っていたけど、バングラデシュでは普通なことに気が付いた。

世界の子どもたちについて

- ・ルビナさん（授業で扱った家事使用人をしている少女）も夢をもってほしい。バングラデシュの子どもは日本の子どもより忙しいんだなと思った。
- ・学校に行って友達をいっぱいつくってほしい。
- ・ルビナさんや、他の家事使用人として働いている人に自由をあげてほしい。
- ・お金をあげたい。仕事ばかりでかわいそう。
- ・子どもが仕事をするのがかわいそうだなと思った。学校に行けなくてかわいそう。
- ・外国では児童労働があるのが不平等だから助け合いが必要。
- ・子どもたちはお金がないから我慢して仕事をしている。大変なのになぜやめないのかな。
- ・児童労働でやりたいことのできない子どもが多く子どもはしょうがなくやっていて、ちゃんとした暮らしをしたいと思っている。

だんだんと世界に目を向けて考えるように

- ・日本は何もできないのかな。今、勉強している間にもいろんなことが起きているのかな。

- ・楽しく生きているところがあれば、今も死にそうなのところもあるから、その子の分まで楽しく生きて、もしできたらその子に募金などをして助けてあげたいと思った。
- ・自分たちが平和に暮らしているとき、他の国の人は平和じゃないかもしれないと思った。
- ・自分が楽しんでいるときも誰かが苦しんでいるのかもしれない。
- ・違う国でも嬉しいこともあるし、悲しいこともある。地球は一つだから戦争をしないで助け合うことが大事だと思う。
- ・豊かな国もあれば、豊かじゃない国もある。
- ・世界で貧しい人はいっぱいいるから、みんな楽で自由な生活を一日でもいいから楽しませたい。
- ・自分がしていることは他の人は当たり前にはできない人もいるからその人の分、自分はありがたみをもってこれから生活する。
- ・できるなら世界中の子どもたちみんなを助けてあげたい。

再び自国に目を向けて考えることも

- ・もちろん外国に募金をするのも大事だけど、その他にも日本にも高齢者が困っているときにはすぐに助けるし募金をする。

世界の子どもたちを救おうと行動する日本人を知って

- ・将来できるだけ支援してあげたい。
- ・ちがう学校の友達に伝える。
- ・自分が支援してあげたり、お金を貸してあげたり、みんなで貧しい暮らしの子どもたちを国で支えたいと思った。
- ・かわいそうだからこのままではダメだと思う人が多いと思った。
- ・違う国のことを思っただけで行動できるのはすごい。
- ・渡辺さん（エクマットラ）みたいにバングラデシュやいろんな国を救う人がたくさんいてほしい。

単元を経て

- ・SDGsについてもっと知りたくなった。
- ・グローバルに興味がわいてきた。他の国の天気や生活はどうなっているのか知りたくなった。
- ・バングラデシュの大変なところを知って、もっと気になってきた。
- ・日本やバングラデシュ以外の国では、どんな災害が起きているのか知りたくなった。
- ・バングラデシュみたいに他の国の人もとても困っているから普段の生活でそのことを思い出していろいろ気を付けるようになった。
- ・今の自分は、バングラデシュのためにこんなことができるなと考えたりすることができるから、前より苦しい思いをしている子の気持ちが分かったと思う。
- ・今の自分がどれだけ幸せに暮らせているのかが分かった。
- ・もっと困っている子どもがいなくなるように施設をつくったりしてほしい。こんな勉強めったにできないので、できてよかった。
- ・募金をした方がいいなって思うようになった。他の国の人だから仲良くしないという気持ちがなくなり、外国人だからって気にしないようになった。
- ・募金をするなど、「何か力になりたい」と思った。
- ・お金を計画的に使うようになった。

11 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

SDGs がなぜ掲げられているのか、どうして目標達成に向かう必要があるのか、世界の課題を知らない子どもたちに、バングラデシュの現状を通して、知る機会を設けたかった。そのために、特に印象に残った「デモによる情勢」「国民性」「食文化」「自然災害がもたらす人々への影響」「ストリートチルドレン」「児童労働」「家事使用人」「国際協力」を題材に授業を行った。世界の課題に目を向けるだけでなく、あたたかい人柄や、目の前の児童と同じくらいの年の子たちが同じような夢を追いかけて努力する姿を知り、どこか遠くの外国のことではなく、地球一つに一緒に住む仲間として世界を捉えるきっかけになるとよいと思った。一つの出来事、物事を多面的、多角的に捉えることの大切さ、日本人の視点から外国人の視点と転換して考えることの大切さ、災害は地球全体の問題であること、世界には仕事をしなければならない同い年の子どもたちがいること、そういった子どもたちを救う日本人がいること。これらを子どもたちに伝え、一緒に世界の人々に寄り添い考えたかった。

12 苦労した点

- ・どうしたら「かわいそう」だけではない気持ちをもたせることができるか。「同情」から「共感」への変容。→上記の学びの軌跡にも載せたように、単元の中の振り返りで「かわいそう」という言葉は児童から出てきてしまった。
- ・様々な課題があるから SDGs という目標が掲げられているという展開にもっていくために、バングラデシュのことで学んだ様々な課題を題材として単元を組んだこと。
- ・3クラス別々で授業を行う中で、それぞれのクラスカラーにより反応が異なり、それぞれの雰囲気によって発問の言葉を選んだり、展開の仕方を工夫したりする必要があった。(答えのない問いをする授業なだけに、児童の発言も自由でそれぞれ異なるものになるのは必然なのだと感じた。)

13 改善点

- ・「かわいそう」ではない捉え方を促す授業づくり。
- ・もっと児童同士で議論するような授業づくり。
- ・フォトランゲージは児童が主体的に考えを出し合う有効な方法だと感じたので、単元の中で多用してしまった。最も有効な使い方を見つけていきたい。
- ・情勢（政治）、食文化（宗教）、災害（自然）、子どもたち（人間）という順で単元を組み、だんだんと児童にとって身近なものにすることで、世界の人々に寄り添うようになってきていたが、「こわい」「危ない」「汚い」などのマイナスのイメージをずっと引きずってしまっている児童もいた。また、そもそも持っている知識として、授業では扱っていないのに「ゴミが溢れていて汚い」という印象をずっと強く抱いている児童もいた。

14 成果が出た点

- ・児童が世界のことに興味をもつようになった。
- ・他の教科の授業では見つけられない児童の一面に出会えた。
- ・低位の児童も積極的にグループワークに参加して活発に発言していた。
- ・外国籍の児童が外国籍であることを恥ずかしがらずに自己開示するようになった。

15 自由記述

自分にできることとして「募金」と考える児童が多かった。この研修を始めた頃は、募金だけが協力ではないことを伝えたい気持ちもあったが、そもそも募金をすることすら意識が薄い学校の風潮もあったので、このように児童自らの言葉として出てきた「募金」にはとても意味があると思った。それを行動に移してってくれたら嬉しい。その他にも、リサイクル、ごみ拾い、ルールを守る、犯罪を起こさない、食べ物を粗末にしない、食べ物を送る、地球のために二酸化炭素を減らす、地球温暖化を止めるために節約する、みんなで協力する、平和を増やす、みんな平等に生きられるようにする、「この人は〇〇だから」と差別しない、差別などをなくすために嫌な言葉は言わない、SDGsをしっかりとやってみんなを平等にする、SDGsの一つでもいいから自分たちでやってみる、自分の家族にこの大変さを知ってもらい家族にも協力してもらう、みんなを笑顔にする、これからも元気でいてほしいと願うなど、児童それぞれの表現の仕方と自分にできることを考えられた経験も大きな一歩だと思っている。